

コミュニティ・スクール委員会だより

発行者：にしみたか学園コミュニティ・スクール委員会 会長 岩本伸一郎

あんなミタカこんなミタカ

vol.3 「コミュニティ・スクール」があればこそ話を聞いてきた
ICU の学生みなさんと二小の高峯校長先生

これまでのふりかえり

視点を変えれば、豊かな街の姿や学びの姿が見えてくる！?そんな想いでお届けする「あんなミタカこんなミタカ」シリーズ。今回のキーワードも「コミュニティ・スクール(以下、CS)」。文科省の web サイトでは、「コミュニティ・スクールは、学校と保護者や地域の皆さんがともに知恵を出し合い、学校運営に意見を反映させることで、一緒に協働しながら子供たちの豊かな成長を支え『地域とともにある学校づくり』を進める法律(地教行法第47条の5)に基づいた仕組み」とありますが、もう少し深く意味や意義をとらえていきたい。そんなわけで vol.1 では CS 委員会二代目会長の矢崎喜美子さんに、vol.2 では CS の基盤をつくられた三鷹市教育委員会教育長の貝ノ瀬滋さんにお話を伺ってきました。学校と地域が連携していくこと。なんだかそれって子どもたちの学びを育みながら、地域を育むことなのかも。そんな改めでの気づきのもと、今回は学校が地域に開かれている具体的な様子について、二小で活動されている国際基督教大学(ICU)の学生の皆さんにお話を伺ってきました。

左から 4 人が ICU の学生さん、二小・高峯校長、CS 委員会コミュニケーション推進部の熊井さん



すでにそこにある未来

CS 委員会(以下、CS)は三鷹市の教育ビジョンでは、学校と地域の更なる連携が目指されています。特に、二小・井口小・二小からなるここににしみたか学園では、「学校3部制」の活動が始まるようになっています。まさに「学校教育の場」「放課後の場」「多様な活動の場」として、地域にひらかれた学校のあり方をより模索していくタイミングでもあるように思います。でもそれって、全く新しいことが始まるというわけではなく、既に行われていることの素敵な部分をより拡充していくことだと思えます。そこで今回はその中でも、近隣の大学である ICU の学生の方々による活動に注目して、これからの可能性をみんなを感じてみる機会になればと考えています。

ICU 生:今日は ICU から4名で来ていますが、そのうち2人は英語教育を学んでいて英語教師になる予定だったり目指したりしています。もう2人はボランティアの団体に所属しています。それぞれの興味関心に合わせて活動をさせてもらっています。

ICUには、地域と学びを
実践研究する活動が！
例えば・・・

ICU Manabi-ai

Manabi-aiは、地域の小学生とICU生の架け橋を目指して、2022年に誕生した新しい学生団体。主に二小を舞台として、授業サポートやワークショップ企画を行なっています。

ICU 英語教育実践研究会

(Association of Fieldwork in Language Teaching) AFLTは、地域の小中高生に対して英語ワークショップやクラブを開催し、参加した生徒に英語学習の「価値」「楽しさ」「目的」に気づいてもらう活動をされています。

学校3部制とは

第二中学校 校長 青木睦

「スクール・コミュニティの創造・発展に向けては、学校とつながりをもつ機会を増やすことも重要です。このため、より地域に開かれた、地域みんなの学校、

地域の共有地「コモンズ」としての学校に移行していくことを目指しています。具体的には、学校施設を時間帯に応じて機能転換し、学校教育の場(第一部)、多様な豊かな体験・経験ができる放課後の場(第二部)、夜間などにおける生涯学習・スポーツ・地域活動など、大人を主とした多様な活動の場(第三部)として活用する「学校3部制」の実現に向け、市長部局と連携しながら取り組みを進めています。(「みたかの教育2022・4・17より」)

にしみたか学園では他の学園に先駆けて令和4年度から三鷹市学校地域協働活動事業である「あささんネット」により自主活動の推進がしやすくなり、多様な豊かな体験・経験ができる放課後の場(第二部)の充実をすすめてきました。具体的には漢検や英検の学校での団体受験や中学校での「みたか地域未来塾」(放課後の学習)の学習支援者の確保を行うことで、子どもたちの学習意欲の向上に協力しています。

これまでも二中では「にしみたかお茶クラブ」を行っていましたが、今年度はさらにダンスクラブの試行や二小野球部と地域少年野球クラブとのコラボレーション企画を実施しています。二小では、地域子どもクラブと協力し、ICUの学生さんや保護者によるワークショップが行われています。井口小では、放課後の教室・校庭開放が夏休みも含め、毎日行われるようになり、様々な体験企画も実施されています。12月にはにしみたか学園として地域と学校の子どもたちで取り組んだ企画である「あささんフェスティバル」(コンサート)など、放課後の子どもたちの活動の場を確保しつつ、地域の子どもを支える団体との協力しながら未来を担う「にしみたか学園」の子どもたちを育てていきたいと考えています。

昨年12月に行われた、「あささんフェスティバル」での一場面、総勢400人もの方が参加してくれました。



にしみたか学園ホームページ

本紙はコミュニティ・スクール委員会コミュニケーション推進部(CS 委コミ推部)が企画編集しています。CS 委員会に関してご意見・ご質問・ご相談などありましたら、メンバーまでお気軽にお寄せください。

CS：結構幅広い領域で小学校に関わっていらっしゃるって聞いたのですが、例えばどのようなことをされているのでしょうか？

ICU生：英語も含めた授業全般のサポートとして学級に入っていたり、参加型の読み聞かせをしたり、登下校の交通安全の見守りをしていたり、自分たちで英語教育のワークショップもやらせて頂いたりしています。

CS：おお、すごい。保護者としてはめちゃくちゃ嬉しくなるんですが、大変じゃないですか？

ICU生：校長先生からは、「来れる時に来てください」と言ってもらっているので、そんな無理をしている感じでもないですよ。子どもたちと触れ合えたり、研究していることをきちんと実践できることも嬉しいですね。

高専校長：やっぱりお互いに、楽しかったり、Win Winじゃないと続かないですからね。

CS：そういう柔軟なコーディネーションって、逆に校長先生は大変じゃないんですか？

「ねばならない」にしない

CS：こういった活動って、続けていったり広がっていったりすることってやっぱり苦勞も多いのでは？と、どうしても考えてしまうのですが…

ICU生：英語教育のワークショップは、リクエストを頂いて三鷹市内広域の小学生の方々に対象を広げていたり、大学の先生と継続的なプロジェクトになるように活動母体としての実践研究会を立ち上げたりもしています。

CS：いやはや、感服します…

高専校長：二小とICUさんの繋がりでいうと、他にも例えば1年生が大学のキャンパス内でどんぐり拾いをさせて頂いたり、6年生のキャリア教育の機会にもご協力を頂いています。子どもたちや地域をめぐって、人や場所の橋渡しをしていく役割を学校はこれからもっと担っていく必要があると考えています。そうすることで、子どもたちはもちろんのこと、お互いにとっても良いと思うんです。そして、迷ったら楽しいほうへ。それがとても大切。「こうしなければならぬ」「ああしなければならぬ」ばかりだと、エネルギー湧いて来ないですよ。

高専校長：最初の窓口はやりませんが、放課後の活動だったら「二小桜子ども広場」さん（放課後の子どもたちの居場所作りの活動）が受け皿となって調整してくれますし、すごく動いているかというところでもないですよ。地域のさまざまな力が集まれば、子どもたちにとってより良いことって色々できるんです。

個別的で 具体的なことの大切さ

CS：地域にはいろんな方がいらっしゃいますもんね。暮らしていたり、働いていたたり、ICUのみなさんのように学ばれていたり。そういった多様な方々の力が、子どもたちのために発揮されていく未来は素敵だなと感じます。それでいうと、英語教育のワークショップってどんなことをされたんですか？

ICU生：英語「で」何かをするということを中心にしています。そして、その何かを通して英語も学べちゃうという。なので、英語を使って理科、図工、演劇などをやるようなワークショップを夏休みにイベント的に開催したり、「二小桜子ども広場」さんでは継続的に子どもたちと関わりながら、「桃太郎」をアレンジして英語で上演することに挑戦しました。

CS：イベントとしての単発開催は参加しやすいですし、一方で、子どもたちとの継続的な関わりも持っていただけではないのも、なんだから嬉しいですね。

ICU生：やっぱり回を重ねることで、子どもたちの成長を見られるのもとてもやりがいがあります。ちなみに、演劇の発表の際には、ICUに来ている留学生にもお客さんとして来てもらいました。少しでも英語でコミュニケーションをとってみたい、楽しかった！という記憶を持ってもらいたいです。

CS：自然と国際交流の体験ができていても本当に素敵ですね。子どもたちがさまざまな方々との関わりの中で学んでいくことは、CSの本質であるような気がします。

ICU生：私は視覚障害があるんですが、「障害理解」がテーマの授業の中で子どもたちからの質問を受けて欲しいというリクエストを頂いて授業に参加させて頂いたこともあります。それまでの読み聞かせでこちらのことを知ってくれている子もいるので、「あの時に来てくれていたよね」と声を掛けてくれることもあります。子どもたちからのいろんなリアクションはやっぱりとても嬉しいです。

CS：子どもたちにとって、ものすごく大切な体験ですね。みなさん本当にありがとうございます。

CS：確かに、そのほうがいろんな人たちが関わりやすくなりますよね。それに、そういった人の関わりや繋がりは地域の大切な財産であるように感じました。農家さんやお店や会社、それに大学や福祉施設など。それぞれの学校ごとに周囲の特性も多様だと思います。学校と地域が連携を深めていくと、食の地産地消ならぬ、学びの地産地消といった世界観が広がります。これからのにしてみたら学園、より楽しみになりましたし、私たちも頑張りたいと思います。本日はありがとうございます！



高専校長先生と、左から国際基督教大学（ICU）の吉田さん、沼野さん・坂本さん・大藪さん



次のページでは、ICUの学生さんの活動と、学校3部制の説明があるよ！

*この記事は、90分にわたるインタビューをもとに、編集をして再構成したのになります。未公開部分は、コミュニケーション推進部のメンバーの役得として胸に秘めて、これからの活動に活かしていきたいです♡ ICUの学生の皆さん、高専校長先生、ありがとうございます。